

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授受承認第六二七号
平成二十八年二月一日発行(第百十九卷第二号)

ホトトギス

二月号



俳句随想〔四百四〕

汀子

今年には俳誌のお祝いが多く、各地の大会にも大勢の誌友が集って下さったことを先ず感謝申し上げたい。毎年、春秋に回り持ちで倶楽部合同句会が大阪で開催される。秋のその大会へ出席するべくお伺いする途中で私は転んで伺えなくなつたのを本当に申し訳なく思っている。後で選をさせて頂いたが、やはり臨場感がある中で選句をさせて頂くのと、後から我が家で選句をするのでは何か少し違うように思う。もしかしたらその方がより客観的に選句が出来たと言えるかも知れないが選句をしながらつくづく選句が大切であることを考える時間を持つた。

最近特に投句の申で、誤字、脱字が多いように思う。歴史的仮名遣いの間違い、例えば山を越へる。耐える。絶へる。言う。などは間違いである。我々が踏襲している「季題」を「季語」というのが一般化されているように思う方々も多い。我々伝統を重んじているものは、必ず「季題」と言つて頂きたい。

「季題」は昔から多くの俳人が使つてきた事によつて唯季節の言葉だけではなく短い詩である俳句の余韻として季題に語らせるといふ大事な季節の言葉なのである。使い方にも無理があつてはならないと思う。短い詩である俳句を如何に多くの事柄を伝えて行けるかをどうぞ推敲して言葉を選び、素晴らしい作品にして頂きたいと思つている。選句をしながら、素晴らしい作品に出会つた時の選者の喜びは限りなく大きく、選者も又勉強をさせて頂いていることを知つて頂きたい。

句日記 汀子

平成二十七年二月一日 下朝句会

早春の会に集へる二十人
一番機雪の予報を退けて
佐助やここより人の往来なく
二の替京を彩る人通り
暖かくなればと祈る心あり

二月二日 ロイヤル俳壇

薄氷や動かぬ水となりゆける
春寒くとも明るさよ静けさよ
いつより庭の一割クロッカス
過ぐ時間追うて二月を励まねば
次のこと考へて春寒くとも

二月七日 芦屋ホトギス会

洗ひ置く水菜の高の新しく
一雨のありて焼野ともう言へず
白梅の魁けし花増えてをり
薄氷の水面に変はるところかな

二月十日 大阪倶楽部

早春といふ安心のなかりけり
薄氷に庭の水音消えてをり
堂々とバレンタインの日の企画
打合せ済めば出掛けて浅き春
今日よりは心にも春一步づつ

二月十日 綿業倶楽部

濃紅梅よりはじまりし梅暦
楽しめばバレンタインの日なりけり
口にしてより春寒でありしこと

見飽きるといふことのなき濃紅梅
二月十二日 清交社

春浅し明日上京の身ごしらへ
明るさを正面にして君子蘭
朝の間の東風強き川沿ひの道
不用意に出掛け来しこと強東風に
稿債も励みの一つ春浅し
ことづては欠席といふ春の風邪

二月十三日 工業倶楽部

ひそむもの飛び立たせつつ野焼かな
紅梅にはじまる庭の花暦
早春のこの日待たるる旅路あり
早春の明るさにある油断かな
二月十三日 アネモネ句会

今日は明日ならずバレンタインの夜
存問は心にあたりぬ春寒し
邂逅よ春寒とても寄せつけず
明るさに馴れたる油断春寒し
紅白の遅速を問ふも梅二月
不祝儀の黒よそほへば春寒し

二月十七日 有恒俳句会

あくまでも余寒なりしとあなどれる
あなどれぬ余寒と思ひつつ外出
木の実植ゑそこに未来の生れけり
梅咲きて忽ち添へる香りかな
梅咲けば梅に従ふ旅心
二月十七日 無名会

口に出す人出さぬ人春寒し
春寒といふ口実のありにけり
東京につながらる電話春の雪
春寒も家居にあれば自ら
太陽に応へたるよりいぬふぐり
いぬふぐりよりはじまりし野の径
いぬふぐり大いぬふぐり一万歩
二月十八日 夏潮句会

飾られし雛に侍る心はも
ここに植植えたく植糸て浅き春
薄氷や二三歩四五歩引返す
又逢へて次郎左衛門雛とこそ
語らばや春めく心杞陽展
鼎談に杞陽を語ることも春
横川路の椿待たるる日と思ふ

二月二十六日 きとらぎ会

雪しろに山の消息ありそめし
冴返る雨ともならず上京す
春の雨連れ来し如く上京す
どこまでも伸びて雪しろなりしかな
二月二十七日 時雨句会

今の世に生きて絵踏の世を思ふ
絶対踏まぬ絵踏といへざりし
金縷梅の花の不思議を活けにけり
絵踏の世遠し今こそ語らばや
まだ咲かぬまんざく談義つづきをり
新若布とてうすみどりなりしこと

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十七年二月一日 虚子記念文学館授句

外つ 国の兄弟 偲び 春浅し

二月一日 野分会青屋例会

早春を奏でるチェロの十二人
いぬふぐり宇宙の果てを知りたくて
早春の船出となれる一会かな
ほんたうはふまれないのよいぬふぐり

二月三日 むさし野旅行会

節分の宮と思へぬ静けさに
節分の空裂くスカイツリーかな
待春の富嶽都心を俯瞰して

二月五日 蕉心会

こんな日も春と思へばそれなりに
白々と天より二月礼者来る
絵踏するやうな都心の足取りに
曇天に近づくほどに梅白し
散るものを嘲笑ふかに椿咲く
榎 桂 櫻 従 へ 梅 白 し

落椿仰向けといふ気品かな
福島の方が暖かいんだつて

二月六日 「円虹」二十周年記念祝賀俳句大会

祝ぎの座は二月礼者の華やぎに
成年を迎へし俳誌暖かし
雪解の関ヶ原とは祝ぎの色

二月七日 青屋ホトトギス会

賀の余韻てふ梅が香でありにけり
はんなりと一椀仕上げたる京菜
薄氷の閉ぢ込めてゐる昨夜の星

二月九日 朝日カルチャー若草句会

まだ風のとんがつてゐる二月かな
浅き春 心通へる人と居て
薄氷を踏んで朝礼始まれる
梅が香に江戸の風情を引き寄せて
春浅き日の存問を受けてをり
薄氷に星集まつて来る夜更け

二月十二日 土筆会

日当るや紅梅の黙深くして
一枚の踏絵の疵の語るもの
薄氷のあれば伸びゆく子等の足

二月十二日 俳句さく咲く収録

ライバルはシャムや我が家の猫の恋
二月十八日 北國文芸選考時
春寒も 未来へ繋ぐ一歩かな

二月十九日 登高会

芝焼いて若草山の鎮もれる
風神の怒りに触れて野火猛る
海苔舟の着く棧橋を揺らしつつ
早春の音を軋ませ山手線
野火煙 単線列車包みゆく

二月二十日 六甲会

白々と富嶽余寒を纏ひつつ

紅梅の透けて塗り替へられし空
紅梅に来て戸惑へる風の色
稜線を白銀に染め余寒かな
帰郷して六甲 凜てふ余寒

杞陽来よ虚子来よ鳴雪忌の句座へ

二月二十一日 虚子生誕俳句祭

芦屋川春のせせらぎ奏でをり
二月二十二日 野分会東京例会
早春の虚子誕生日てふ合点
過去のこと皆早春に弾け飛ぶ

いぬふぐり地球の色といふ誇り

二月二十四日 若水句会

焼山の煙 太白潤ませ
春の風邪目元が語る佳人かな
盆梅の気品遺して逝かれけり
先づ鼻が喉が頭が春の風邪

焼山に風神の舞ふ一とところ

二月二十五日 日黒学園句会

いぬふぐり地球に色を貰ひけり
祖母の忌を修し鳴雪忌を修し
薄氷の下にマグマを秘めし国
虚子門の誇りを今に鳴雪忌

鳴雪忌梨園の星の追ふやうに

薄氷や儀式のやうに踏まれゆく

雑詠 廣太郎 選

鰯雲空に傾斜のありにけり 八尾 山下美典
 秋風の雲の形にまで及ぶ 同
 夜なべして文字の乱れに気づきけり 同
 活けられて存在感の吾亦紅 長岡 安原 葉
 鰯とてさげすまされし世もありし 同
 あす比叡けふは横浜金風裡 同
 木槿咲く垣根へだてて子の住める 神戸 日下徳一
 母の里まだ外廁ちちろ鳴く 同
 鎮守へは畦が近道曼珠沙華 同
 鳥渡る入江に小さき水平線 東京 田丸千種
 澄む水の角より崩るビルの影 同
 居待月かかりとどめのスピリッツ 同
 秋晴へ雲の扉の開きそむ 香川 湯川 雅
 これしきの風には飛べぬ草の絮 同
 よく見えぬ方へと興味烏瓜 同
 入り乱れてや人の秋鹿の秋 奈良 古賀しづれ
 月の塔野辺の草草供華として 同
 禁門の今宵は月へ放たるる 同

人の世をはなれ流灯果てにけり 福山 竹下陶子
 終戦日草むす屍ともなれず 同
 故国恋ふ心切なる終戦日 同
 新走光のごとく注がるる 神戸 藤井啓子
 待宵の古本市の匂ひかな 同
 秋灯下やつぱり好きな紙の辞書 同
 息継いでまた登りゆく秋の山 箕面 井上浩一郎
 ひとり居を出づれば野辺に待つばつた 同
 秋風や海白波の立つばかり 同
 南溟に果てし友の忌バナナ熟れ 東京 大久保白村
 雲海の去り噴煙の残りけり 同
 大女将昭和一桁土用灸 同
 秋日傘日ざしからりとありにけり 龍ヶ崎 今橋眞理子
 唐辛子近寄り難き赤となる 同
 揺れてまた咲き増ゆるかに風の萩 同
 重き雲追ひ出してゐる秋の風 東京 橋本くに彦
 ひとむれの遅速の色を曼珠沙華 同
 車京の影といふ影天高し 同
 気まぐれに鳴く鈴虫を待つてをり 神戸 山田佳乃
 提灯の点り八尾の夜の長き 同
 その中に君のぬさうな秋桜 同
 冷やかな眼の贋作を見逃さず 静岡 須藤常央
 盆の月噴火止まざる山とあり 同
 衰へてゆく聴覚に蚯蚓鳴く 同

雑詠句評（二月号より）

一度、それこそ「蛍」の乱舞する真つ只中に入った事がある。人を怖がるような事もなく、平気で掌に乗ってきて光っている。誠に神秘的であつたが、この句からもそんな不思議かとも言える世界が垣間見られる。儂い命であるが故の季題ならではの生慥が余すところなく表現されている。（廣太郎）

むつみ・美 奇・静 龍
保佳・とほ歩・中正
眞理子・肖 子・憲 明
葉 ・廣太郎

星座には手の届きさう間涼し 行橋進 峰月

手のひらを零れ蛍の夜へもどる 渋川 山本素竹

南には蠍座、中天には白鳥座をつなぐ天の川を中心に満天の星を筆者が仰いだのは今年の夏、三瓶であつた。気の早い台風が過ぎ、塵ひとつない夜空であつたろう。

この句のようにどの星座にも手を伸ばせば触れそうであつた。きつと、作者もそのような思いをされたのであろう。しかも「間涼し」という見事な季題、これ以上の措辞はないであらう。（美奇）

近くの川にも少しは蛍が戻ってきたらしいが、昔は帰り道に蛍が飛び交い珍しい光景ではなかつた。群馬在住の作者にとつては案外近いところで蛍の夜を楽しむのかもしれない。ただ見るだけでなく「手のひら」に止まってくれた蛍は恋蛍かもしれない。詩心が掻き立てられた作者だからこそ、手のひらから零れて又闇の中へと戻って行った蛍に離れがたいものを感じたのだらう。たんとんと詠んでいるところに「蛍の夜」へ戻って行った蛍に何とも言えない余情を抱いている作者。詩情が深い。（むつみ）

平成二十七年九月六日に急逝された作者である。空気の綺麗な場所でも満天の星を御覧になつたのであろう。そんな場所では確かに星がより近くに見え、手を伸ばせば本当に掴めそうな錯覚さえ起こすものである。そんな夏の夜を一杯楽しんでおられる作者の気持が季題に凝縮されている。（廣太郎）

天地有情

金子選

良夜かな消えてしまひし星明り
満天の星満目の虫時雨
東京 河野美奇
土佐薄暑路面電車の軋み来る
同 稲畑廣太郎
土佐の旅茅花流しにをさめたる
同
峰寺の樹々みな高き良夜かな
長岡 安原 葉
山寺の夜は更け易し虫の闇
同
いつ見ても敦盛草は一会の花
神戸 後藤比奈夫
妻をふと想ふ銀河の濃き夜は
同
風になり草になりたや秋の蝶
大阪 佐土井知津子
秋の蝶草に触るれば情けあり
同
孫娘手足に避暑の日々にあり
相模原 木村享史
落伍せず歩きし花野振り返る
同
澄みおるは住吉さんの落し水
神戸 後藤立夫
住吉の御田にやはり稲雀
同
月待つや北海道も東京も
東京 今井千鶴子
秋灯下ペースメーカー吾を支配
同
下萌えて大地しきりに呟ける
福山 竹下陶子
いぬふぐり眺めてをれば目もあやに
同

秋風の一語一語を聞いてゐる
熊本 岩岡中正
曼珠沙華彼岸へ渡す橋ひとつ
同
大盃にびたりと注がれ新走
神戸 三村純也
注ぎ注がれ新酒一升またたく間
同
ゆらゆらと運河は海へ去年今年
東京 今井肖子
寒の入しばらくは月細りゆく
同
良夜かな海にお舟を浮かばせて
神戸 和田華凜
十六夜や逢ひたきと逢へぬもの
同
草木に人に白露の夜明けかな
袋井 湖東 紀子
萩括りたるより日差あり余る
同
帰省の子まづ仏前に寛げる
吹田 大橋 暁
いづくよりの風とも分かず秋めける
同
コスモスの道高原へ高原へ
東京 大久保白村
山の日を斜めに受けて松虫草
同
秋涼の夜々育ちゆく月ありて
龍ヶ崎 今橋眞理子
秋冷を払ふかに街灯ともれり
同
うつ靡きうち靡き野や秋深む
箕面 井上浩一郎
野も人も言葉少なに秋深き
同

おんぶ

稲畑汀子

年に一度開催される日本伝統俳句協会の俳句大会、今年は北信越地区の担当で、越後湯沢で開催されることになっていた。新しい年を迎えたのがついこの間と思っていたのに、いつしか一年の後半になっていて、これから年末にかけて予定がぎっしり入っている。特に頼まれた講演が幾つかあるのが気になっていた。

越後湯沢というと東京からさほど遠くなく、新幹線も通っている。東京からの往復切符は妹の朋子が準備してくれていた。泊まる部屋も一緒である。冬はスキー場として有名な越後湯沢は明るい街の印象があり、駅の近くには大きなホテルが幾つかあって、その中の一つが今回の会場だと聞いていた。

「近くて助かるわ」

越後湯沢は芦屋のわが家からだとして程近いとは言えないが、今回は東京滞在中でのスケジュールであり、案外近く感じる。関西方面、九州、四国、東海、中国、東北、北海道と全画各地から来られるのであるから受け入れ側の気遣いも大変である。選者も二十名程。最終的に賞を決める段階ででんやわんやになって、いつも時間がかかって来たのを今年は何とかしなければならぬと思っていた。

台風十七号、十八号の影響の雨で、関東地方の大きな水の被害が次々報道されていた。四年ほど前の東日本大震災の時、ホトトギスの大会が流れてしまった事を思い出した。

当日雨だと大変であるが、俳句会である。雨が降れば雨の名句が生まれるであろうからそれも又いいのである。

安原葉さんのお計らいにより、運転手役の藤原君の運転で今日の吟行地をバスとは別に巡って下さることになっていた。

吟行地の日本三大渓谷の清津峡の入口を入ると、さすが冷やっとしていてその先は果てなき如くトンネルが続いている。先ず歩けるかどうか、日頃の運動不足が露顕してしまうのも仕方がない。

所々に見晴所があつてそこから覗くと見事な柱状節理の岩肌が峨々と聳え、溪流が怒濤となり滔々と渦巻いて流れている。災害をもたらした豪雨の片鱗がここに窺える。往復千五百米の上り坂をゆっくり歩き、折返点に辿り着いてほっとした。帰りの下り坂はほいほいと楽なものである。途中、バスで着かれた仲間たちと出会って挨拶する。

「頑張つて下さい。溪流がすごいです」

「その先まで大変ですか？」

「簡単ですよ……、と言えるかどうか、まあ、私も歩けたのですから。でも帰りの下り坂は楽ちゃん、楽ちゃんですよ」

「行つてきます」

「行ってらつしゃい」

やれやれであった。

二日間で三句出句とはやや物足りない感じがするが、それだけに却って難しい。

一句も出来ていないが、快眠が出来て爽やかな朝を迎えた。

「食事に行きましょう」

妹を誘って廊下に出た。食事はバイキングである。すれ違った

葉さんが、食堂の混雑を告げながら、

「あとで出直して来ます」

と部屋の方へ戻られた。我々ももう少し後に出直す事にした。

二度目にエレベーターに乗ると、太って大きい若い男性が赤ちゃんをおんぶしているのと乗り合わせた。まだ稚い赤んぼが柔らかいおんぶの布にくるまれて、お父さんらしい若い男の背中に乗っている。食堂に案内されると我々の隣のテーブルにその家族が座っていた。大柄のお母さんらしい人はばくばくと食事をしている。赤んぼを背負った男もばくばくと食事に余念がない。

赤ん坊は沈み込んで顔が見えなくなっている。

「ねえ朋ちゃん、背負われた赤ちゃん、あれでは息が出来ないの

じゃないかしら」

「え？」

「あんなの、赤ちゃん、息が出来ないみたいよ」

「本当、でも、余計なことを言わないほうがいいわよ」

「赤んぼがいよいよ沈んで行って、大丈夫かしら」

「ほっときなさいよ。直ぐに余計な事を言うんだから」

「でも、気が付いていないようよ」

「いいから、ほって置きなさいよ」

私はすつと立ち上がって、お母さんらしい向かいに座っている女性の側に行つて言った。

「貴女のお子さんでしょうか。おんぶの中で息ができないのでは

ないかしら」

「大丈夫です」

と言つて女性はそっぽを向いた。

席に戻ると、朋子が笑つて言う。

「汀子姉さんはお節介なんだから」

知らん顔してまだ食事をばくばく食べている若い夫婦のことはもうどうでもよくなった。食事を終えて立ち上がり、おんぶされた赤んぼの後ろを通るとき赤んぼの背中を触るとむくむくと起き上がった。

「よかったわ」

「ばかねえ」

朋子が笑っている。向かいのお母さんがひよつとお辞儀をして笑つていた。食堂はもうすっかり空いていた。